

Our Own Translation

英語B班：松本 翔 鳥川 拓人 須崎 夏帆
高島 美乃 西村 萌 細谷 真希那

1. はじめに

私たちは「翻訳とは何か」ということを追究するために、『Anne of Green Gables』という本を用いました。『Anne of Green Gables』は約100年前のカナダで、ルーシー・モード・モンゴメリによって書かれた本です。この本は村岡花子さんをはじめ、沢山の翻訳家によって日本語に翻訳されています。私たちは異なる翻訳家によって翻訳された文章にはどのような違いがあるのか調べました。異なる翻訳家の翻訳でも同じ単語や表現を使っているのか、登場人物の描き方にどのような違いがあるのか等を調べました。そのようなことを調べていると、翻訳によって非常に多くの違いがあることに気づきました。そこで私たちは、なぜ一つの英語の物語からこんなにもたくさんの翻訳の違いが生まれるのか、という疑問を持ちました。

2. 研究方法

私たちは3つのグループに分かれ、3つのテーマについて調べました。一つ目は「翻訳とは何か」ということ、二つ目は、現代の英語と約100年前に使われていた英語とで何か違いがあるのか、ということ、三つ目は、異なる日本語でも読み手が受け取る印象は同じなのか、ということです。

3. 研究結果

(1) 翻訳とは何か

調べる前は、翻訳とはただ日本語に訳すことだと思っていましたが、調べてみると、登場人物や場面、状況に合った表現を選び、英語の原文の雰囲気にてできるだけ近づけることが大切だということがわかりました。

(2) 現代の英語と約100年前に使われていた英語とで何か違いがあるのか

まずはじめに、いくつかの書物を読みました。そこから得た第一の結論は思ったより「違いはほとんどない」ということです。次に、ALTの方に『赤毛のアン』の原文を読んでもらい、その感想を聞いてみました。そこで得た次の結論は、「全体的に古いとは感じないが、所々に古い印象を受ける表現がある」ということです。このことを踏まえて得た結論は、約100年前の英語は一文が長く、飾った言葉が多く、読みづらいものであり、現代の英語は簡潔で、文字通りの意味の表現が多く、読みやすいものである、ということでした。

(3) 異なる日本語でも読み手が受け取る印象は同じなのか

この疑問に対して明確な結論を得るために、アンケートを取りました。アンケートは、複数の翻訳家による『Anne of Green Gables』の翻訳版の一部を読んでもらい、それぞれでどのような印象を受けるかを聞くという方法で行いました。これによって得た結論は、異なる翻訳家の翻訳から受け取る印象には違いが生じる、ということです。

4. 発展

これらの調査の結果を踏まえて、私たちオリジナルの翻訳を作りました。これを作る際に意識したのは、原作の世界観を大切にしつつ現代の人々にとって分かりやすい訳をするということです。しかし、実際にやってみると結構難しいことが分かりました。

5. まとめ

今回の研究で私たちは、翻訳とはただ訳すことではなく、原文の雰囲気にてできるだけ近づけることを意識して訳することである、ということが分かりました。その作品がつくられた地域、背景、時代などを頭に入れたうえで、生活様式、登場人物、時代や文化を象徴するものなどの描写を日本語でどう表現するか工夫が必要です。同じものを指す言葉でもどの表現を選択するかで世界観や読み手の受け取り方も変わります。

6. 考察

私たちが捉える「翻訳」は上述の通りですが、研究を進めるにつれて翻訳家によって「翻訳」の捉え方に違いがあるようにも感じました。翻訳家各々が捉える「翻訳」によって、創り出される翻訳版の世界観も変わると私たちは考えます。原作とは言語が異なる時点で「翻訳」は新たな世界観を生み出すものとも言えます。

この研究では過去のことに焦点を当ててきましたが、未来についても同じことが言えると思います。100年前の原文を現在の日本語に翻訳したとき、これまで述べてきたように読み手による解釈の差異が生じるのですから、現在の日本語と未来の日本語でも違いが生じるでしょう。未来の現代風赤毛のアンが出版されたとき、原作で作者が描きたかったニュアンスや雰囲気、人物像、生活風景などは、どれだけ残されているのでしょうか。もしかすると、未来のアンはギルバートを何らかのハードウェアで叩くかもしれません。

※ギルバートにからかわれたアンが怒って石盤でギルバートを叩くシーンがあります。

7. 参考文献ならびに参考 Web ページ

『Anne of Green Gables』 Lucy Maud Montgomery (1908 年)

『赤毛のアン』 村岡花子 訳 (1952 年) (2008 年), 中村佐喜子 訳 (1957 年),

神山妙子 訳 (1973 年), 茅野美ど里 訳 (1987 年),

谷口由美子 訳 (1990 年), 谷詰則子 訳 (1990 年),

掛川恭子 訳 (1990 年 - 1991 年), 山本史郎 訳 (1999 年)